

『今月の天候と農作業』

通巻第5613号
3月号
平成30年3月1日発行
宮崎県
宮崎地方気象台



【 予報のポイント 】

暖かい空気が流れ込みやすく、向こう1か月の気温は高いでしょう。気圧の谷や湿った空気の影響を受けやすく、向こう1か月の日照時間は、平年並か少なく、降水量は平年並か多い見込みです。

【 確 率(%) 】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	20	30	50
降水量	九州南部	20	40	40
日照時間	九州南部	40	40	20

【 予想される向こう1か月の天候 】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

向こう1か月の平均気温は高い確率50%です。降水量は平年並または多い確率ともに40%です。日照時間は平年並または少ない確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は高い確率70%です。2週目は高い確率50%です。

<1 週目の予報> 3月3日(土)～3月9日(金)

低気圧や前線の影響で曇りや雨の日が多いでしょう。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、

週間天気予報 (<http://www.jma.go.jp/jp/week/>) を参照してください。

<2 週目の予報> 3月10日(土)～3月16日(金)

天気は数日の周期で変わりますが、気圧の谷や湿った空気の影響で、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

<3 週目から4週目の予報> 3月17日(土)～3月30日(金)

天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

普通作物

◆早期水稲

1 育苗管理

寒暖の差が大きいため、ハウス管理に注意が必要です。緑化は通気性のある被覆資材で2～3日遮光し、温度管理は、日中は25℃まで、夜温は15℃は確保します。かん水は午前中に行います。床土が過湿の時は、かん水の必要はありません。硬化時期に10℃以下の低温や25℃以上の高温に遭うと、ムレ苗が発生しやすくなるので気象情報を確認し、温度管理を行います。田植え7日前頃から外気に慣らします。

2 本田準備

ほ場の漏水が激しいと水温が上がりにくく、肥料や除草剤の効果も不安定となります。また、寒波が来た際の深水対策も難しくなるので、代掻きは丁寧に行い、畦の補修を行います。基肥の施用時期が早過ぎると成分が流亡するので、できるだけ代かき頃に施用し、全層にすき込みます。

3 病虫害防除

いもち病対策として田植前に薬剤箱処理を行います。購入苗では既に処理済みの箱もあるので確認します。また、苗箱に除草剤を誤散布しないよう注意します。

4 移植作業と除草剤散布

低温時は無理に移植せず日延べし、移植後は深水で防寒します。栽植密度は、早期水稲では有効茎（穂数）が不足しやすいので、極端な疎植は避けましょう。

除草剤は散布時期や水深に注意が必要です。軟弱苗や強風時の散布、浅水で拡散が不十分な場合は薬害が発生しやすくなります。ラベルを熟読の上、適切に散布し、散布後7日間は落水せずに管理します。

◆麦類

1 排水対策と病虫害防除

雨が多くなるため、周囲や畦間に排水溝を設けます。

赤かび病が発生しやすいので、裸麦・小麦では穂揃期に、大麦では穂揃期から7～10日後（蒴殻抽出期）に防除し、天候を踏まえ、その7日後頃にも行います。

（荒砂 英人）

施設野菜

◆共通事項

蒸散量が多くなるため、日射量の増加に応じてかん水量を増やしていきませんが、かん水間隔を短くし、回数を増やすことで全体のかん水量を増やすようにします。

日中は、内カーテンなどを活用して日射量を調節し、十分な換気を行い、ハウス内の温度が高くなるように注意します。

夜温が高い場合は、内カーテンを開放し、加温機や循環扇による送風で葉や果実の結露を防止します。

◆きゅうり

蒸散量が増加すると、葉の老化が進み、草勢が低下しやすくなります。高温乾燥が原因なので内ビニールなどを活用し、日射を弱めて湿度を確保します。高温になると果形も乱れやすくなるため、十分な換気に努めます。今年は黄化えそ病（M Y S V）の発生は少ない傾向ですが、害虫の飛込みを防止し、薬剤防除も徹底します。

◆ピーマン

ハウス内が高温になると授粉がうまく行われず、奇形果の発生や果実の肥大不良による赤果等の発生につながります。十分な換気を行い、ハウスが高温多湿にならないようにします。

気温の上昇とともに収穫までの日数も短くなるため、最低でも3～4日間隔での収穫を心がけ、草勢維持に努めます。混み合っている枝を整理し、光線が中まで入るように整枝・剪定を行い、白果の発生を防止します。

◆トマト

ミニトマトは、気温上昇に伴い裂果が増加します。土壌水分の急激な変化が裂果の主な原因のため、こまめに少量多回数のかん水を行います。

トマトは、高温で乾燥すると尻腐果が発生しやすくなるのでかん水量を増やしていきま。また、草勢の低下で小玉果になるので追肥が遅れないように注意します。

◆いちご

温度は出来る限り生育適温に近づけ、低温管理を心がけます。ハダニ類が多く発生しているため、薬剤が均一に付着するよう、古葉や収穫の終わった果梗の除去はこまめに行い、定期的な薬剤散布を行います。

（黒木 正晶）

葉茎菜類及びいも類

◆さといも疫病の重要対策

早生種の定植期です。近年深刻な被害が発生している疫病の伝染を防ぐために、ほ場に保存中のさといもは早めに片付けます。残さの分解には、トラクター速度を遅く、ロータリー回転を速くし、できるだけ細かく破砕します。残さの分解には1ヶ月以上かかるため、余裕をもって作業をしましょう。残さは畑付近の空き地に決して放棄しないでください。

さといもは、連作障害が発生するため、4年以上、作付けをしていないほ場を選び、センチュウ消毒を行います。また、さといもは梅雨明け以降、大柄に生長するため、散布した農薬がかかりにくくなります。植え付け時には作業管理通路を10m間隔で作っておきましょう。

種いもは、病害虫のあるもの、芽つぶれのあるものは確実に除き、健全なものを大きさ順（30～50g程度）に揃え、センチュウや黒斑病の消毒を行います。薬剤消毒は種いもの表面にしっかり届くよう、土を洗い落としてから行います。

◆食用かんしょ

トンネル栽培では、換気作業を徹底します。苗床は温度管理を徹底し、気温の高い日は外気にさらして徒長を防ぎ、健苗の育成に努めます。

◆スイートコーン

トンネル栽培は、間引きの時期です。本葉4～5枚の頃に健全で揃ったものを1株に整理しましょう。マルチ内が乾燥する場合は畦間や株元へのかん水を行ってください。

また、ハウス栽培や大型トンネル栽培で雄穂抽出期を迎えるものについては、雄穂が出始めたら窒素成分で5～6kgを追肥しましょう。

◆らっきょう

上旬には、球の肥大と生育促進のため、窒素成分で2～3kg程度を遅れないように追肥しましょう。球の緑化を防止するため、併せて土寄せを行いましょう。

(杉村 幸代)

果 樹

1 常緑果樹

◆かんきつ全般

樹勢強化や新梢・花芽の充実のために春肥を施用しましょう。春肥の吸収効率を高めるには、速効性の肥料を萌芽直前に施用するのが効果的です。また、発芽期から開花期にかけて、窒素主体の葉面散布を数回行いましょう。特に今年は、前年の着花数が少ない傾向が見られたため、多くの花が咲き、多くの養分を必要とするので、徹底して行いましょう

◆完熟きんかん

収穫が終了したら縮間伐・剪定の時期です。枝が隣接樹に当たり始めたら縮間伐を行いましょう。剪定は樹勢や樹齢を考慮し、主枝、亜主枝の配置を考えながら樹冠内部まで日が当たるようにしましょう。

剪定は間引き剪定を基本とし、短めの枝を多く確保しましょう。

剪定の遅れは枝の充実を遅らせ、一番花の結果を悪くします。4月上旬までには必ず終わらせるようにしましょう。

◆日向夏

3月に入ると露地日向夏の収穫が始まります。減酸の早い早生日向夏から収穫を開始し、在来日向夏は減酸を確認してから収穫しましょう。

今年は低温の影響からす上がり果の発生が見られます。必ず品質の調査をしてから出荷しましょう。

◆マンゴー

幼果期から果実肥大期には、薬害が発生しやすくなります。薬剤散布は晴天日の午前中、薬液が速やかに乾く環境下で行いましょう。

また、果実の赤色の部分を増やすために、果実のつり直しを行い、緑色の側にも光を当てるようにしましょう。

3月になると次第に日射が強くなり、日焼け果が発生することがあります。内カーテンや遮光ネットを利用し、日焼けを防止しましょう。

2 落葉果樹

◆梅

開花期～展葉期にかけて病害虫が一斉に発生します。予防や初期防除を徹底しましょう。

(鈴木 美里)

花 き

◆夏秋ギク

7月出荷作型の挿し芽を上旬から行います。挿し穂は無病で充実した揃いの良いものを晴天日の午後に採穂します。6月出荷作型のフローラル優香は消灯前後を問わず生育期間全般で低温に遭遇すると貫生花が発生しやすくなるので、電照期間中から気温を確保するように努めましょう。

また、精の一世については親株時の低温遭遇により幼若性を獲得している場合があるので、定植後から12℃程度で加温を行いましょ。

◆スイートピー

今年は秋～冬にかけて、気温が低かったため、2月前半頃まで草勢が強く、かん水や追肥のタイミングが遅れ、草勢の低下が懸念されます。3月に入ると気温が上昇し、気象が不安定になり、さらに草勢の管理が難しくなるので、対応が遅れないように植物を十分に観察し、草勢の維持に努めましょう。液肥の施用にあたっては、根を傷めないように高濃度の液肥の使用は避けましょ。

3月は気候が不安定な日が増えてくるので、細やかな温度管理に努めるとともに、花卉の花しみや灰色かび病の発生を低減するため、十分な換気とともに、微生物農薬の使用や除湿のための強制的な換気、循環扇による送風を行いましょ。

下旬から採種の交配期になります。採種を行う株は必ずつる下げを行い、授粉後に着果が確認されるまではかん水はやや控えめにしてください。

◆デルフィニウム

沿海地域では、3番花の出荷時期です。気温が上昇してくるので、軟弱にならないよう昼間の換気を十分に行うとともに、必要に応じて葉面散布等も行いましょ。

◆ホオズキ

8月出荷作型の植え付け期です。萌芽時の生長点の焼けを防ぐため、マルチの穴あけは適期に行いましょ。気温が上昇し、ハウス内への害虫の侵入も多くなるので、防虫ネットの設置やほ場周辺の防除に努めましょ。

◆ラナンキュラス

3月は気温が上昇し、開花が早くなります。気温に応じ切り前を調節しましょ。日中の温度管理は収量確保のため15℃程度を目安にしましょ。

(中村 広)

畜産

◆家畜防疫対策

今月は渡り鳥が営巣地に帰るため、鳥インフルエンザの侵入リスクは減少していくと考えられますが、韓国や台湾では発生しているため、引き続き防疫を徹底しましょう。また、口蹄疫についても東アジア地域では、続発しており、侵入リスクは高い状況にあるので、農場消毒等の徹底的な防疫を実施しましょう。更に、家畜の生産性に影響を及ぼす他の感染症についても、気温の日較差が大きくなる季節は家禽や家畜の免疫力が低下し、発生しやすくなります。消毒等の防疫対策の徹底とともに、畜舎環境の改善も行いましょう。

◆家畜の飼養管理

今月は外気温の日較差が大きく、家畜が体調を崩しやすい時期です。このため、朝夕の畜舎カーテンの開閉や舎内温度が上昇する昼間は換気扇による換気、細霧による湿度管理等を行い、舎内の温湿度環境を整えてください。また、病気発生時は早期対処ができるように、家畜の健康状態の観察を徹底しましょう。

(大山 佐喜子)

工芸作物

◆茶

1 春整枝

春整枝は2月下旬～3月上旬の平均気温が10℃となる頃を目安に実施します。整枝の高さは、葉層を8cm程度確保できるように、去年の最終摘採面から3～5cm上げた位置とします。また、秋整枝を実施した茶園では、越冬芽にかからない高さで丁寧に整枝します。ただし、本年1月下旬～2月中旬にかけての強い寒波で、越冬芽の寒害（芽つぶれ）が多発している場合は、一～二節程度刈り落とします。

2 芽出し肥の施用

芽出し肥は一番茶摘採の25日前までに硫安等の速効性肥料を施与します。各地域の施肥基準に準じ、畝間だけでなく雨落ち部まで幅広く施用します。施用後は、流亡防止と分解促進のため畝間を軽く攪拌します。

3 防霜対策

防霜を開始する時期は、秋整枝した茶園では一番茶萌芽の15日前から、春整枝した茶園では春整枝直後からとし、いずれも一番茶の摘採が終了するまで実施します。

防霜ファンの設定温度は、萌芽期前後は3℃、一～二葉期は5℃、二葉期以降は7℃とし

ます。

スプリンクラーで防霜する場合は、摘採面の気温が萌芽期前後は0℃、一～二葉期は1℃、二葉期以降は2℃となったら散水を開始します。

4 カンザワハダニの防除

カンザワハダニの防除適期は2月下旬～3月上旬頃の春整枝後となります。

各地域の暦に準じ、裾部や葉裏へ薬液が十分にかかるように散布します。

5 定植

露地で育苗した苗の定植は、2月下旬～3月中旬が適期です。ハウス等の施設内で育苗した苗は定植後の極端な低温を避けるため、一番茶前（4月）の定植が適切です。なお、ペーパーポット苗を定植する場合は、定植後の乾燥防止のため、ポットの上部が植穴より上に出ないように注意が必要です。

（黒木 清人）

◆しいたけ

1 採取

発生したしいたけは、目標の品柄に応じて適期に採取します。

雨子（あまこ）での採取は、乾燥に時間がかかる上、品質低下の原因にもなるので、なるべく晴天を選んで日和子（ひよりこ）で採取します。また、ほだ木の表面を傷めないように、かつヒダに触れないように丁寧に採取します。

採取容器は通気性が良く、浅いもの（専用の採取カゴ等）を使い、ヒダに触れないよう柄を上にして入れます。採取後は振動を少なくし、できるだけ早く乾燥場に運び、エビラなどに広げて品質の低下を防ぎます。特に雨子（あまこ）は素早く処理します。

2 乾燥

高温での急激な乾燥は品質低下を招きます。乾燥初期は低めの温度設定とし、乾燥機内の温湿度や換気に注意しながら徐々に温度を上げます。

（永野 学）

◆たばこ

品質・収量の確保に向けて適期・適切に健苗の移植に努めましょう。

1 移植は葉数が9～10枚（米粒大の心葉まで含めた枚数）の白い根が肥土全体に覆っている根張りの良い苗を選んで行いましょう。

葉数が少ない小苗を移植すると、本畑での活着と生長が遅くなり、大苗では、本畑初期の低温による不時発蕾（葉数減少）が発生しやすくなります。

植穴は、直径10～13cm、深さ13～15cm程度に揃えましょう。極端な深植え、浅植えは初期生育が遅れ、不揃いの要因となります。

また、移植の際は抱土が露出しないよう注意しましょう。抱土が露出していると乾燥し、根の伸張が悪く、活着が遅れ、不揃いの要因となります。

移植後は移植苗の確認手直しを行ない、活着促進に努めましょう。

2 移植後の管理作業として、

- ①排水溝の完備を徹底し、生育不良、病害発生防止に努めましょう。
- ②マルチ片の回収袋を設置し、植付け穴のちぎれそうなマルチや、ほ地内に飛散しているマルチ片を回収します。
- ③ドリフト（農薬飛散）対策として、他作物が隣接する場合は周辺農家との話し合いを行い、障壁物の設置やのぼり旗の設置等を行いましょう
- ④黄斑えそ病の発生が懸念される場合は、防虫ネットの設置や共同防除に向けた話し合いを行い、発生防止に努めましょう。

（宮崎県たばこ耕作組合）

内容の詳細について

3月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県農業経営支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病虫害の防除対策、気象災害の事前・事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ。

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

（<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>）

向こう1カ月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

農作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
早期水稲	いもち病	—	育苗時の発生の有無に関わらず、移植時の箱施薬を徹底します。
	スクミリンゴガイ	—	越冬場所である水田土壌表層部を細かく耕耘して殺貝します。この場合、土壌は硬く、耕耘ピッチは小さいほど効果が高くなります。用排水路からのスクミリンゴガイの侵入を防ぐため、水口にネットを設置する等して侵入を防ぎます。
施設野菜類	病害全般	—	天候の変化には細心の注意を払い、施設内の温湿度管理を徹底するとともに早期防除に努めます。 また、夜温が高めの加温機が稼働しない日は、施設内が多湿になり、病害の発生が助長される傾向があるので特に注意が必要です。
冬春きゅうり	うどんこ病 べと病 灰色かび病 褐斑病 黄化えそ病 (MYSV)	やや少 やや少 並 やや少 前年・前々年 より少ない	いずれの病害も多発すると防除効果が上がりにくいので予防に重点をおき、発生が見られたら初期防除を徹底します。また、罹病葉は重要な感染源となるので、適宜除去し園外に持ち出します。 黄化えそ病の感染株を確認した場合は、速やかに抜き取り、ビニール袋等に入れて完全に枯れるまで密封処理します。また、黄化えそ病を媒介するミナミキイロアザミウマは、発生初期に防除するとともに、卵と蛹には薬剤がかかりにくいので、最少でも7日間隔で3回の連続した防除を行います。
	シキイロアザミウマ	少	
	病害虫全般(改植時の留意点)	—	ウイルス病を媒介するアザミウマ類、コナジラミ類などの微小害虫に対しては、抜根する前の防除を徹底するとともに、抜根後は少なくとも20日間は蒸し込みます。次作の定植時に薬剤を施用し、害虫類の防除を徹底します。
冬春ピーマン	うどんこ病 斑点病 黒枯病	並 少 並	斑点病・黒枯病は多湿条件で発生しやすいので、ハウス内の適正な温湿度管理、排水対策等を徹底します。また、罹病葉は深刻な感染源となるので、適宜除去し園外に持ち出します。
	シキイロアザミウマ ヒラズハアザミウマ タバココナジラミ	少 やや多 並	いずれの害虫とも、今後、暖かくなるにつれて増加する恐れがあります。特にアザミウマ類の発生が多いところでは、最少でも7日間隔で3回の連続的な薬剤散布を行い防除を徹底します。
冬春トマト	葉かび病 すすかび病 灰色かび病 黄化葉巻病(TYLCV) タバココナジラミ	やや多 やや多 並 並 少	葉かび病、すすかび病、灰色かび病は多湿条件で発生しやすいので、施設内が過湿にならないよう換気に努めます。 トマト黄化葉巻病の発病株は伝染源になるので、早期に根ごと抜き取り、適切に処分するとともに、媒介虫であるタバココナジラミの防除も徹底します。
冬春いちご	うどんこ病 炭疽病 ハダニ類 アブラムシ類	並 並 並 並	いずれの病害虫も多発してからでは根絶は困難なので、低密度のうち定期的に防除を行います。 ハダニ類は、複数の殺ダニ剤に抵抗性をもつ個体群が確認されているので、物理的に窒息死させる気門封鎖剤を防除体系に組み込みます。
カンキツ	そうか病 かいよう病 ミカンハダニ	並 やや少 並	いずれの病害も越冬病斑は伝染源になるので、発見したら直ちに剪除します。そうか病は、春葉での感染が多いと開花後果実への感染を抑えることは難しいので、発芽初期の防除は必ず行います。 生育密度が高いほ場や冬季マシン油乳剤を散布できなかったほ場では、春季(3月上中旬、萌芽前)にマシン油乳剤による防除を行います。
茶	カンザワハダニ	やや少	防除適期は、増殖が始まる前の密度の低い時期(～3月中旬)です。株の内部やすそ部の葉裏に多く生息しているので、十分に薬液が到達するよう丁寧に防除します。

1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるかを予測したものです。

2) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページは、<http://www.jpnpn.ne.jp/miyazaki> です。

